

# 英文学との出会いは高校での先生との出会い



シリーズ  
先生紹介  
第6回

きみら ひさのり  
君羅 久則教授

言語センター/センター長・教授

昭和45年 弘前大学文学部人文学科卒  
昭和47年 東北大学大学院文学研究科修了  
同年4月 小樽商科大学商学部講師  
昭和52年 同 助教授  
平成2~3年 文部省在外研究員  
バーミンガム大付属シェークスピア研究所  
平成4年 小樽商科大学言語センター教授  
平成13年 言語センター長

**商大で先生より古い方はいらっしゃいますか？**  
君羅：秋山学長お一人になってしまいました。1972年赴任ですから、31年になります。

**秋山学長に劣らずスポーツ万能とお聞きしていますが、**  
君羅：中学校（中斗満小・中学校）では、すべての対外競技に駆り出されましたね。

**野球では？**  
君羅：4番でキャッチャーでした。ところが高校では一応陸上部に所属したのですが、ほとんどなにもしませんでした。

**さて、英文学に進まれたきっかけは？**  
君羅：高校での先生との出会いでした。なぜか「シェークスピアを読みなさい」と勧められてですね... 大学では英文科に直行。その後ずっとシェークスピア一筋。普通多くの方はシェークスピアを「卒業し」他の方面へと向かわれるのですが、私は卒業できずにシェークスピア留年生というわけです。もちろん英詩は広く読んで研究していますが。

**31年間教えてこられて商大生の変わり様は？**  
君羅：昔は一般の英語の授業で相当難しいものを選んでもついてきましたね。今日では教育方針が変わり、実用重視になって、文学テキストを選択することは減ってきました。たしかにコミュニケーション能力が先にあるべきなのですが、理想的にはその先に進めたい、そのために相当工夫する必要がありますね。

**商大英語の伝統というのはどのように感じられていますか？**  
君羅：商大英語の伝統というのは、初期から努力して一分野にかたよらない、いろいろな分野の先生がバランスを保ちながら、一点、語学の学習環

境の整備に腐心してきたことにありますね。教授法にも積極的に取り組みながら、メソッドだけではなくそれを実現できる環境の創出に学校を挙げて努力してきたことですね。具体的には単にLL教室を真っ先に導入しただけではなくLL機能を延長した自習室をシステム化して設置したことがそうです。

**さて、小樽も変わったことでしょうか。**  
君羅：赴任するまでは、汽車の窓から見ていただけで、駅の改札がホームより下にあることが妙に印象に残っていましたね。駅前や運河周辺だけ見れば随分と変わりましたが、でもいいものがたくさん残っていますね小樽は。歩いて楽しい、発見があるとよく言われますよね。

**では、小樽を一言で言うと？**  
君羅：住んでみると離れがたい。

**なるほど、そのせいででしょうか、卒業生がよく先生を訪ねてきますよね。**

君羅：ゼミを20年続けてきましたから、多くのゼミ生が教職に就いて全道に散らばっていて、皆よく小樽を訪ねてくれます。昔は英語教職志望の学生のためのゼミでしたからね。現在はその性格はなくなりましたが、これからも広く文学作品を中心にしたゼミとして続けて行こうと思っています。

**「継続は力なり」ですね。さて先生、口をついででる英詩はやはり、**  
君羅：はい、シェークスピアのソネットですね。「夏にたとえましょうか...」（以下朗々と続くが、省略）

**すると小樽といっても、**  
君羅：夏の方が好きです。言語センターから眺める雪景色も絶景には違いありませんが。